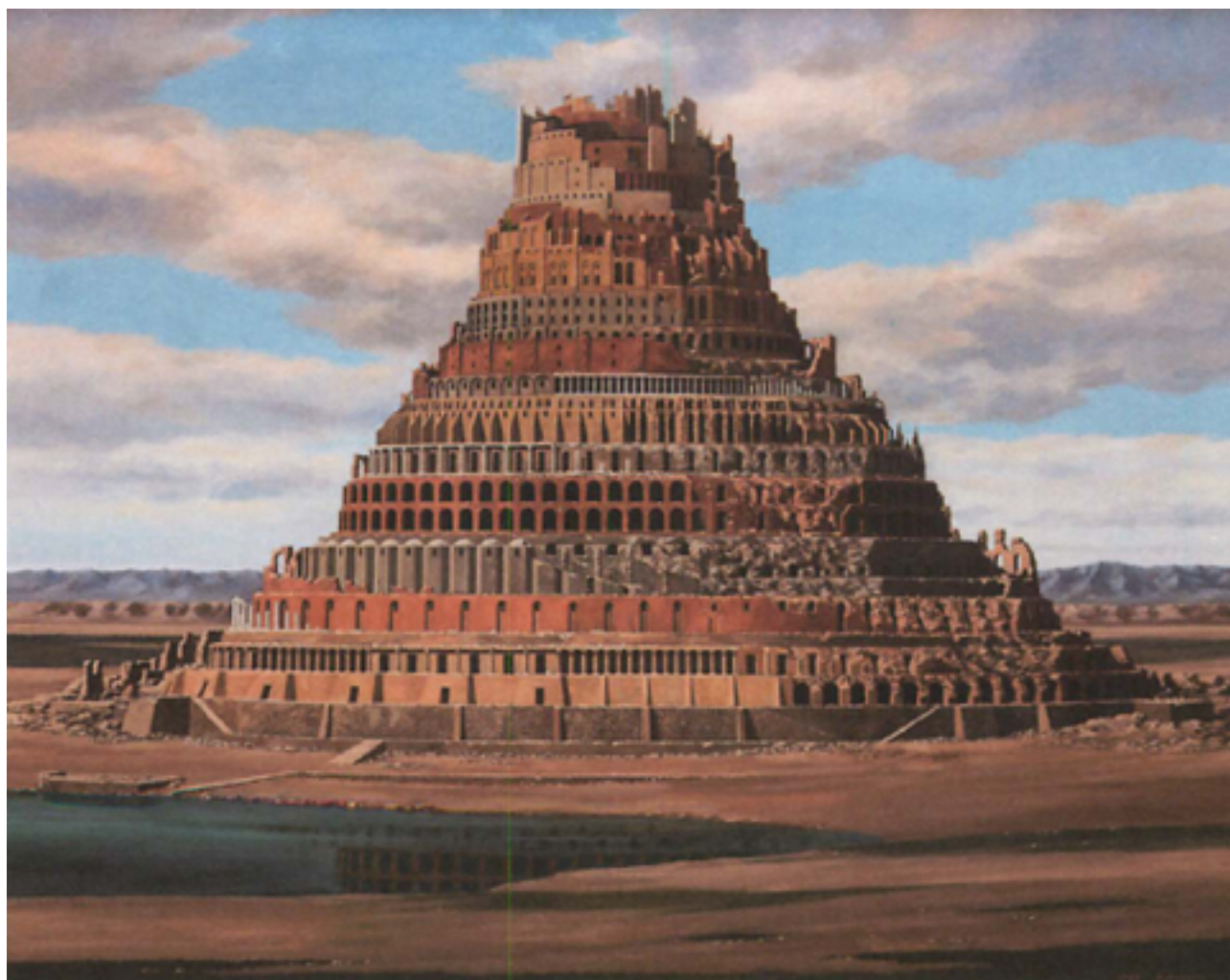


バベルの塔

10月のある日あるチャンスがあって、一枚の絵の前に立った。驚愕が全身を貫いた。それはウィーンの経験をはるかに越えたものであった。画家は藤飯治平（1928~2005）とあった。絵には小さく「バベルの塔」



と題名がついていた。ウィーンのアムステルダム美術館には同名で世界的に有名なピーテル・ブリューゲルの作品があり、何度か訪れて魅惑の時間を過

ごしたことがある。二つの作品を眺めながら絵画という芸術のもつ先見性を考えてみた。

(1) 「バベルの塔」は旧約聖書創世記11章に記されている。

世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた。東の方から移動してきた人々は、シニアルの地に平野を見つけ、そこに住み着いた。彼らは「れんがを作って、それをよく焼こう」と話し合った。石の代わりにれんがを、しっくい代わりにアスファルトを用いた。彼らは「さあ、天にまで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」と言った。

主は降って来て、人の子らが建てた、塔のある町を見て、言われた。

「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことを始めたのだ。これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない。我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう」

主は彼らをそこから全地に散らされたので、彼らはこの町の建設をやめた。こういうわけで、この町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を混乱（バラル）させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたからである（新共同訳より引用）

（注）バベル、ウルク、アッカドがシニアルの地あり、ニムロドという地上で最初の勇士がいた。彼の王国という表現がなされている。

聖書は読みやすいようで難しいことが多いが、その一つがこの物語の解釈である。

ニムドロはノアの息子ハムの子孫である（10章）ノアの息子セムの子孫がアブラハムであるが、アブラハムは神からの召命を受け、「あなたの生まれ故郷、父の家を離れて、わたしが示す地に行きなさい」と行き先も分からずにウルクから脱出をする。後のモーセの出エジプトに通ずるものである。神学的なことはこれ以上の解釈は無理であるが、文明が急速に発達し都市が形成されつつあることが分かる。推察するにニムロ

ド王が洪水から自分たちを守るために天にまで届かんばかりの高層の建物の町を造るために科学者に建築様式を命じ、日干し煉瓦をよく焼いた煉瓦に代えてアスファルトで固めるという技術がすでに開発されていることが分かる。都市の中にジグラットという名で高さ90m7階建てで最



上階には神殿があったと言われている。高校生世界史B基準で言えば地理

的にはバビロン（カルディアのウル）である。（地図はバイブルワールド・いのちのことは社刊から引用）

(2) ブリュエルのバベルの塔

ウィーン美術史美術館にある作品は1563年とある。そのころのオランダ、特にブリュエルが住んでいたアントワープはアジアとアフリカを結ぶ航路、アメリカへの大西洋航路の大拠点となつて、中東、バルト海、イギリスを結ぶ南北貿易が栄え、ヨーロッパの中で著しい成長を遂げていた。ブリュエルは50年後のアントワープを見ていたのかも知れない。絵画ではすでに塔は上層で剥がれ傾き始めている。一階にいる



人々にはそれは見えないので一所懸命に黙々と塔の完成に向かって働いている。絵からは恐ろしいほどの実相が感じられる。又、驚くほど厳密に細部まで丹念に描き込まれているので、写真を見ているような切迫感がある。支配者と働く者の関係が見えているが、その見えている向こうに傾いている巨大な組織があるように感じられる。ブリュエルが何を言わんとしているか文章はない。見るものに感じ考える自由が与えられている。

(3)藤飯治平のバベルの塔 (1985年作) 1ページ

画家は緻密な描写力と完璧な構成力で知られているという。写実絵画の根本理念に厳密に取り組んだ画家と言われている。彼の「バベルの塔」は言葉で言い表せない「美」がある。それが沈黙してある。人がいない。不気味である。塔は少し壊れ始めているが堂々と聳え立っている。それを褒め称えるはずの人がいない。堂々としてありながら孤独の極みを語っているかのようなのである。案内に珠玉の一文があった。

「藤飯作品の真骨頂は、実相を写して虚構を表現しているといって差し支えない世界を創造していることでしょう」この文を凝視して意味を探った。虚構の中に、実相があることになる。絵画は虚構である。画家は実相を見て描いている。画家に見えているのは近未来の実相である。今、見える者の向こうに画家はそれを感じて具象している。藤飯治平が描いた「バベルの塔」は21世紀の塔かもしれない。ブリュッゲルは16世紀の「バベルの塔」を描いていた。展覧会で知る限りでは藤飯治平の最初のバベルの塔は1974年のものがありその不均衡と不気味な暗さはここで紹介することはできない。1977年作のソドムの町を紹介しよう。



人がいない。ただこの絵には一条の救いの光を見ることができる。画家が意図したか否かは分からない。解説もない。手前右の石が乙女の祈りに見える。静かに深い祈りの姿勢がある。新しい出発は祈りから。

(4)ボイマンス美術館の

ブリュウゲルのもう一枚の「バベルの塔」

偶然というより必然と言う方が相応しい広告が目に入った。

ボイマンス美術館所蔵 ブリュウゲル「バベルの塔」展が、東京都美術館で開催される。期間は2017年4月18日(火)から7月2日(日)まで。なお、大阪・国立国際美術館にも巡回予定だ。



ピーテル・ブルユウゲル1世 バベルの塔 1568年頃 油彩、板 Museum BVB,
Rotterdam, Netherlands